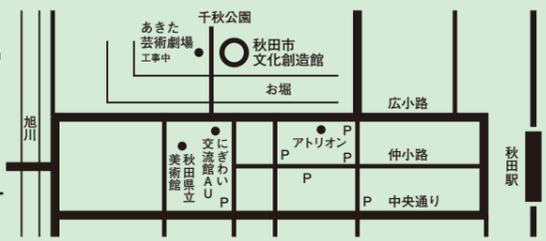


そうする?

1号 2021年12月



●アクセス：JR秋田駅西口から徒歩約10分
●駐車場はありませんので近隣の有料駐車場をご利用ください

歓声に包まれ 秋田市文化創造館も 嬉しそう



あそびのはじまり2021

千秋公園の葉も美しく色づいた10月31日、
子どものクリエイティブな感性を育てる
体験イベントにおよそ500人が来場しました。

当館および中心市街地を活動の拠点とする市民のユニークな活動を公募し、その実現に向け支援を行う「秋田市文化創造館パートナー事業」。今年は7団体が様々な活動を行っています。そのひとつが「あそびのはじまり2021」です。

ABSラジオの特設スタジオ「こどもらじお」前から、小さなアナウンサー3人のMCで開幕宣言。1Fのコミュニティスペースでは、秋田のクラフトマンやアーティスト、デザイナー達による「お仕事」ワークショップが軒を連ね、木工、革細工、電機、お花、お菓子などのものづくりや、編集者やカメラマンに変身してフリーペーパーやフォトブックの制作を体験。「音楽会がはじまるよ!」コーナーでは、思い思いの楽器を手に即興演奏して、館内をパレードしました。

屋外広場には、お隣の中央図書館明徳館から移動図書館「イソップ号」がやって来て、青空ライブラリーが出現。館の大きなガラス窓はお絵描きのキャンパスに大変身しました。積み木やゲームが所狭しと並べられ、空間全体が大きなおもちゃ箱になりました。子どもたちの歓声に包まれ、文化創造館もなんだか嬉しそうに見えました。

コロナウイルスの感染状況を睨みつつのイベント企画、代表の工藤留美さんはじめ実行委員会のみなさんはご苦労の連続だったはずなのに、搬出を終え空っぽになったコミュニティスペースで「次はどんなことやろうか」とさっそくアイデアを話し始めている…タフだなあ…でも、そんなハッピーな1日だったのです。(テキスト：前田優子)



「あそびのはじまり」代表・「のはらむら」工藤留美さんのインタビュー記事はこちら



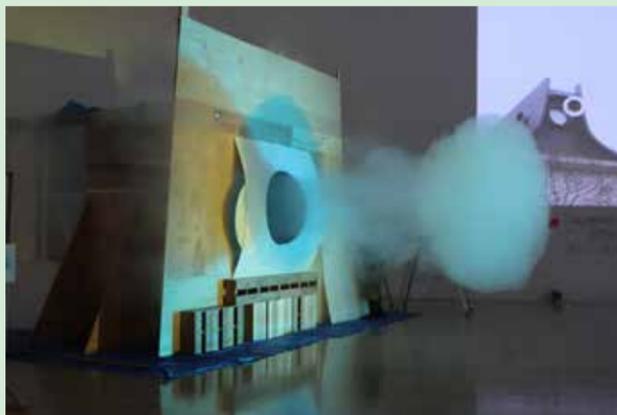
写真：大森克己

日時：2021年10月31日(日) 10:00-17:00
会場：1Fコミュニティスペース+屋外広場+デッキ
主催：あそびのはじまり実行委員会

クリエイター・イン・レジデンス「.oO」 秋田市文化創造館の丸窓から .oOが出る世界

秋田県内外から招聘された専門家やクリエイターが当館に滞在し、実験的なテーマに取り組む「クリエイター・イン・レジデンス」。企画公募「SPACE LABO 2020」にてグランプリを受賞した松田朕佳さんと兩宮滯さんによるプロジェクト「.oO」が実施されました。

プロジェクト「.oO」では、20年後、当館の屋根の丸窓から空気砲を発射し、秋田の空に煙の輪を浮かべる計画を通して、普段とは違う時間と空間のスケールで物事を考えました。作家名のCHIKA, MIWO, & MOREにある「& MORE」は、CHIKA, MIWO以外にこのプロジェクトに関わる人々や出来事を意味します。巨大空気砲の公開制作や、毎日正午には時報の空気砲を発射、参加者と20年後の未来を見据えるワークショップ「SUNDAY DONUTS」を繰り返して、2041年プラン実現のために試行錯誤しました。



期間：2021年10月11日(月)-11月28日(日)
会場：スタジオA1ほか

第1部 「装置をつくる」



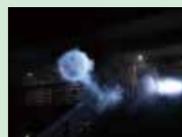
10/11
丸窓を囲んでいる壁に丸窓の絵を描く。



10/13-11/1
丸窓と同じ直径2mの発射口を持つ空気砲模型をつくる。



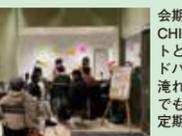
10/13-11/1
スモークマシンを使って煙の輪っかを出す実験をする。



11/11
空気砲模型を使った発射テスト!



11/17~
「空気砲が時報だったらおもしろい」という声にお答えし、毎日12時に空気砲を発射することに。[.oO]が12時をお知らせします!



会期中にはCHIKA & MIWOがホストとなり、占いやハンドパワーでコーヒーを淹れるパフォーマンスでもてなすスナックを定期開催。



センシュアテラスの人気商品「センシュードーナツ」とコラボしたSUNDAY DONUTSも限定発売されました。



11/20、23、27
文化創造館の丸窓から[.oO]を浮かべるため、チャレンジを重ねる!



詳細はこちら

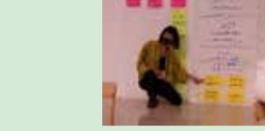
第2部 「20年後の世界をつくる」

「SUNDAY DONUTS」とは丸窓から「.oO」が出る世界を、実現(創造)するにはどうしたらいいか。共に作戦を立て、実現に向けて行動する全5回の対話型ワークショップ。

11/3
第1回「SUNDAY DONUTS」『どうやって作る?』。丸窓から出る「.oO」とは何なのか?それを出すためには何をすればいい?参加してくれた&MOREの皆さんから実現に向けたアイデアが集まりました。



11/7
第2回「SUNDAY DONUTS」『時間を捉える』。プロジェクトの完成時期として見据えた20年後の未来とは。時間について6つの問いを起点に話し合い、見えない未来をイメージしてみます。



11/14
第3回「SUNDAY DONUTS」『ノラネコを捕まえる』。ノラネコは私たちが住む現実世界とは異なる時間軸の世界に住んでいる?想像力を働かせて、「.oO」が浮かぶ架空の世界を探します。

11/21
第4回「SUNDAY DONUTS」『文化創造館を人格化して占う』。占いという手法を使うことで、普段とは異なった基準を持って現実と向き合うことができるのか?文化創造館のバイオリズムを知り、「.oO」が実現する日を導いてみましょう。

11/23
第5回「SUNDAY DONUTS」『もうちょっとです』。これまで現実世界と架空世界を行き来しながら、秋田の空に「.oO」が浮かぶイメージを共有し、ディスカッションを重ねてきたSUNDAY DONUTS。最終回はこのプロジェクトを20年先まで受け継いでいくためにはどうすればいいのか、話し合いました。



(テキスト：藤本悠里子)

未来の生活を考えるスクール

「ここは自分が居てもいい場所だ」と思えるのはどんな時だろうか？「未来の生活を考えるスクール」では、今よりちょっと先の生活を考えるためのトークイベントやワークショップを開催し、新しい活動のステップとなるような機会を目指しています。

とにかく家にいたくなかった。自分の部屋は一応あったものの、母親の仕事部屋を兼ねていたのでいつも他人が入り出っていて、脱ぎ散らかした服や読みかけの雑誌はいつの間にかどこかに片付けられてしまう。四方を山に囲まれた地方都市に生まれて、どこへでもママチャリを漕いで行った学生時代、「駐車場がないから行かない」と大人たちが言う中心市街地が、自分たちの遊び場だった。マックやサイゼリヤ、市立図書館、友達通っていた塾のフリースペース、公園など、商業施設や公共施設を「避難場所」として見出していたことを、文化創造館がオープンしてからよく思い出す。

6つある文化創造館のコンセプトのうちひとつは、「すべての人に開かれた環境をつくる」。コンセプトを読んだうえで来館する人などほとんどいないだろうが、これを文字どおりに達成することが、「公共」施設のなによりの役割じゃないだろうか。学校に行きたくないなら、家にいたくないなら、少しだけ一人になりたいなら、「秋田市文化創造館に来てください」と自信を持って言える場所になればいいと思う。わたしも、あなたたちも、誰かを追い出してはいけなしい誰かから追い出されてもいいけない。

「ここは自分が居てもいい場所だ」と思えるのはどんな時だろうか？まず自分を主語にして、自分の気持ちを守るための表現を考えてみる。今年度の「未来の生活を考えるスクール」はそんな感じです。順次レポートも公開していきますので、ぜひご覧ください。

(テキスト：石山律)



第5回：自分のためにつくること
 日時 2022年1月16日(日)
 10:30-12:00 レクチャー
 13:30-15:30 ZINE作りワークショップ
 ※どちらか一方のご参加も歓迎。
 会場 1階コミュニティスペース
 定員 20名(要申込、先着順)

はだしのころ

2015年から秋田市で毎年開催され、障がいのある人もない人もつながる展覧会が、当館で開催されました。

会場①「あきたアート2021 はだしのころ」を企画運営するNPO法人アートリンクうちのあかり代表の安藤郁子さんのお話

子どもの時に「暮しの手帖」(58号1979年)に載っていた千葉盲学校の生徒たちによる陶の彫刻作品を見て衝撃を受け、以来ずっとここに残っています。その後、やまなみ工房や一妻寮、びわこ学園などの滋賀県内の福祉施設に通所・入所している方々による陶の彫刻作品に出会う機会もありました。障がいのある方による作品には、人間が根源的に持っている生きることのちからがそのまま表れていて、そこに惹きつけられているうちにわたしも陶芸家になっていました。

はだしのころは、開催回数を重ねてきたことで「障がいのあるひとの作品」という視点ではなく「はだしのころをした作品」という視点を大切にしよう、ということが明確になってきました。はだしのころとは、否応なく生まれ出てくるありのままの自分、というような意味です。そんな作品って、観るひとを既成概念の枠が一気に消え去るような鮮烈な場に連れて行ってくれるちからがあると思うんです。はだしのころが、そんな鮮烈な作品に出会い、作品・鑑賞者・つくり手のあいだにさまざまな感覚の対話が起る広場のような展覧会になればいいなと思っています。



「はだしのころ」ウェブ展示はこちら

センシュアテラス 営業時間 10:00-17:00



カフェメニュー例
 センシュアドーナツセット
 ドーナツ&デリBOX
 ホットコーヒー
 ホットラテ
 日本茶(ドราフトティー)
 犬用ドーナツ など

施設管理担当のつぶやき
 文化創造館を利用いただく方に「これは使っているの?」「こんなことして大丈夫?」と聞かれます。その度に、本当にいいか、ダメか、ダメならばなぜダメなのかを徹底的に考えるチームが働いています。ルールを設定すれば簡単なんだろうけど、疑問や立ち止まった瞬間にこそ創造的な瞬間はあるはず!じっくり腰をすててまろっこしい対話に参加してみませんか。スタッフも募集中です。(声立さやか)

発行：2021年12月24日 発行元：秋田市文化創造館(指定管理者：NPO法人アーツセンターあきた)
 デザイン：服部一成 編集担当：熊谷新子 印刷：株式会社シナノパブリッシングプレス

切り絵 菅原健一さん

色画用紙を切り抜き、幾重にも重ねて秋田の風景を描く菅原健一さん(大仙市)。これまでに制作した約100点から選んだ作品を、1Fコミュニティスペースで展示いただきました。



—いつから切り絵を?
 切り絵をはじめたのは7~8年ほど前。20代半ばから趣味として絵を描いていました。模写とか、秋田の風景とか。子どもの頃から図工は好きでした。



—どうやって作品を作っているのですか?
 切り絵は、観光ガイドやチラシなど図書館で調べた資料を参考に、下書きをして、型をつくって制作します。カッターやハサミ、時にはパンチをつかって切り抜いた色紙を、糊で幾重にも重ねて貼りつけていく。下書きや型は残しています。残しておけば、また作ることができるから。切り絵をはじめた頃は、参考にした資料そのままを真似て描いていましたが、最近は自分で構図を考えています。モチーフを選ぶのは、身近で馴染みのあるものです。



菅原健一「切り絵展示会」
 日時：2021年6月26日(土)
 会場：1階コミュニティスペース
 主催：菅原健一
 写真：須賀亮平

—初展覧の場所として、当館を選んだのはなぜですか?
 旧秋田県立美術館には2回来たことがありました。藤田嗣治の「秋田の行事」を見て、絵葉書を買って帰った記憶があります。先日、アトリオンで東海林太郎の胸像を見た帰り、たまたま文化創造館に立ち寄って、庭に東海林太郎の立像があることを知りました。それを見て、そろそろやってみようかな、と思って。

(聞き手：三富章恵)



詳細はこちら

テキスト・イラスト・テキスタイルという複数のメディアで制作するはらだ有彩さん。音楽・フェミニズムにまつわる翻訳や執筆、自主出版物のオンラインショップ運営も手がける野中モモさんをゲストに、「自分を鼓舞する・身近な誰かを勇気づける手段」または「自分や誰かを脅かすものへの抵抗の手段」として表現や創造を捉えています。

はじめての個展

生活の中で表現される 俳画の魅力



筆と顔彩、和紙、墨で、俳句の心を簡潔な絵で表現する「俳画」は江戸時代生まれの日本文化。今回は、紙風船をつるし、額や掛け軸を飾りました。キッチンエリアにはさんま、ごぼう、トマトなど食べ物の絵を並べました。「最初から自由な発想とはいかず、コンクリートうちっぱなしの天井を見た時、孫と行ったパンケーキ屋さんの内装を思い出して、家に帰るすぐにパンケーキの絵を描きました。「こういう展示もできる!」とひらめき、「自由にいこう」という気持ちになりました」(代表の折原和子さん)。穏やかな俳画の世界を500人以上の方が来場し堪能しました。



全日本積穂俳画協会秋田教室「第37回俳画作品展」
 期間：2021年10月15日(金)~22日(金)
 会場：1階コミュニティスペース
 主催：全日本積穂俳画協会秋田教室
 写真：須賀亮平

代表の折原和子さん、メンバーの宮川才子さん、杉山恵美子さん3人のインタビュー記事はこちら



あこがれのひと 古関弘さん(新政酒造株式会社)

「新政酒造」で酒造りの最高責任者である杜氏だった古関弘さんは、新政の「農／醸一貫化」を果たすために2016年から秋田市河辺の鶴養で無農薬無肥料の酒米作りに挑戦しています。

突然、酒造りから田んぼへ

社長に、真剣なの?って聞きました。鶴養というところで、米を作るだけではなく、無農薬とか、酒蔵を造るとか本気でやって。地域の方と一緒にやるんですね。何度か確かめて、本気だと言うので。そういう夢を見るなら、頑張ろうと、2ヶ月迷った末に決心しました。

鶴養に来て分かったのは、田んぼはその家の歴史だということ。丁寧に大事に田んぼを育てていらっしやるところに、僕らが、市場のニーズはこっち、オーガニックじゃないと利益が出ませんよとか、画一的なものづくりではなく、ピンキリのピンをやりますよとか、理屈だけでは通用しない。皆さんに納得していただけるレベルの田んぼの姿を無農薬でどうやって作るか、すごく難しいです。大変というよりは、「畏れ」や「責任」で仕事しています。

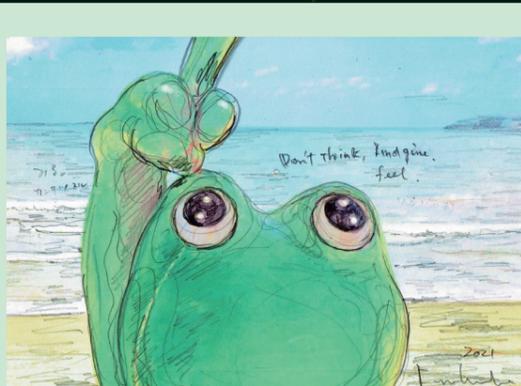


インタビューの全貌はこちら

古関弘(こせきひろむ)さん
 1975年福沢市生まれ。富山県で日本酒の世界に入り、32歳で新政酒造(秋田市大町)に入社。37歳で杜氏に。新政は、秋田県産の酒米を生醸純米造りで蔵発祥の「6号酵母」だけを使用し、木桶仕込みで酒を造っている。現在鶴養の酒米圃場は24町歩に広がり(1町歩は約9,900㎡)、この地に酒蔵と木桶工房を造る予定。



写真：瀧本幹也 聞き手：熊谷新子



かえるくんは観察しながらかえる。いや、ちがうな。考えてはならないかも。イメージしてしまおう。そうどうして。思ってしまう。そこに見えてくる物事の、見えていないところ。裏側を、しくみを、歴史を、それによって喜ぶ人を、悲しんだ人を。儲けた人を、苦しんだ人を。なぜそれがそこにあるのかの理由を。そしてその未来の姿を。それに影響されて動き始める人のことを。対話の広がりを。次に何が起るのかを。観察することは難しい。簡単なけど、深く知るとは難しい。何も知っちゃいない。イメージしたところが正しいかどうかなんてわからない。だから知りたいかえるくん。

文：かえるくん(館長代理) 絵：藤浩志